

平野啓一郎『本心』 文春文庫 2016年

◎著者について、主人公朔也について

1975 年生まれで、私(山口)と同世代、氷河期世代(1970 年-1983 年に生まれた世代)で、この物語の“母”と同世代になる。「僕を産むまで、母は安定した高い賃金の会社で、正社員としては働いていた。それは、“ロスジェネ”と称されていたあの世代では、羨望されるべき生活だった。」(50 頁)したがって、朔也は私の子どもの世代になる。

➡現在と陸続きの物語、おそらくこの物語はすでに実現されつつある。

NHK スペシャル『創られた“真実” ディープフェイクの時代』(2025 年 3 月 18 日)

中国では、AI で死者を創るビジネスが始まっている。

◎「本心」とは何か？

一方で、AI の“母”は、小説のなかではあまり機能していないように感じた。それはオウム返しにすぎない。むしろ興味深いのは、主人公朔也が従事する“リアル・アバター”という仕掛けのほうだった。それは身体を明け渡し、いわば器(うつわ)にして、複数の心を入れるものとして、機能する。母の「本心」、すなわち、母のひとつの心を求める朔也の物語は、いつしか、母のもっていた複数の心を見い出していく。

➡人間という器は、その外見に期待されるような自己の一貫性を超えて、むしろ複数の心が交錯し、ときに衝突する場として存在する。その心はさまざまな器を経巡ってきた。逆説的にも、母の「本心」もまた、さまざまな器を経巡ってきたのだった。

一方が、さっきの一羽なのだろうかと、僕はしばらく見ていたが、どちらがどうとも区別はつかなかった。友達を連れて戻ってきたのなら、僕は歓迎したかった。しかし、新しい二羽が飛んで来たのだとしても、僕はやはり心から、歓迎したい気持ちだった。(478 頁)

雀のそれぞれの個体を超えた「心」を感受している。

(!遠藤周作『深い河』と小説の内容、構造とも、近しく感じる)

◎「分人」

著者は、「分人 dividual」という考え方を提示している。

本書の目的は、人間の基本単位を考え直すことである。

「個人」から「分人」へ。

分人とは何か？この新しい、個人よりも一回り小さな単位を導入するだけで、世界の見え方は一変する。むしろ問題は、個人という単位の大雑把さが、現代の私たちの生活には、最早対応しきれなくなっていることである。

(平野啓一郎『私とは何か「個人」から「分人へ」』講談社現代新書〔2012〕 3頁)

すべての間違いの元は、唯一無二の「本当の自分」という神話である。

そこで、こう考えてみよう。たった一つの「本当の自分」など存在しない。裏返して言うならば、対人関係ごとに見せる複数の顔が、すべて「本当の自分」である。

(同前 7頁)

著者は「分人」という考え方を提示するにあたり、「個人 individual」という考え方が、明治になって日本に輸入された概念であり、西洋文化に独特の発想であったことを説明する。(64頁)そして、ただ「個人」であるような私、「他者を必要としない「本当の自分」というのは、人間を隔離する檻である」という。(98頁)これは自己責任という考え方を想起させる(162頁)。むしろ、「他者との相互作用の中にしか」私という存在は、存在しないのだ。

➡近代にいたり、個人の価値が重視された。そうであればこそ旧来の身分制や家父長制の束縛から解放され、たとえば女性解放運動にも結実した。しかし、一方でそれまでの共同体や物語から切り離され、国家や資本に包囲され、孤絶を深めた、脆弱な存在であった。

◎複数の心、あるいはひとつの心が複数の器に生起し、経巡る

翻って主人公朔也みると、きわめて脆弱な社会に包囲され、孤絶化されていたことがうかがえる。「僕にはもう、中退する学校もない。離脱するなら、あとはもう、この人生から、ということになる(119頁)」つまり、“仕事としてのリアル・アバター”ではなく、“近代のリアル・アバター”。ここにはひとつの世界しかない(資本至上主義的)。

このひとつの世界に、著者は“リアル・アバター”という仕掛けを使って、さまざまな心と心の交錯と衝突を描く。

・第八章 転落 の悪質な依頼者とコンビニの事件(207頁～)

・第十二章 言葉 『僕は、彩花さんが好きなんです。本気なんです。』(393頁)

・第十三章 本心 「僕は慄然とした。VF の〈母〉の手には、確かに生きた人間の感触があり、体温があった」(456頁)

複数の心が交錯しているときにこそ、「心」が感受されている。そもそも心は交錯や衝突の場であった。この過程をつうじて、主人公朔也が、次第に強さを身につけていく物語として、読むことができるのではないか。

◎死者について

著者は、『私とは何か「個人」から「分人へ』』のなかで、大江健三郎(1935-2023)と対談したときの大江の言葉を引いている。

僕のように、これだけ年とってから友人に死なれる場合は、文章を書くことによって次第次第に、その死んだ友人を自分の中に取り込んでしまうんです。あるいは、自分がその死んだ友人という他人の中へ入り込んでいくんです。そして、むしろその死者と自分との関係があいまいなものになってくる。非常に主観的な関係に、相手を取り込んでしまう感じ。」

(「今後四十年の文学を想像する」『ディアログ』)

前回のハン・ガン『少年が来る』で、ハン・ガンが死者の言葉を物語にしたように、ここには文学がなしうる営為があるように思われる。

言葉というのは、私たちそれぞれが生まれる遥か以前から存在していて、死後、遥か後まで存在し続けている。私たちは、生きている数十年の間、一時的にそれを借りて自分を表現しているに過ぎない。誰から借りるのか？一必ず、他者から。本であろうと、対面の会話であろうと、とにかく、私たちは言葉を自分一人では決して身につけられない。(略)そこで、私は考えた。「あの人がもし生きていたら、…」というのは、決して自分一人では想像できず、言葉に出来なかったはずだ。故人とのコミュニケーションを通じて被った影響がなければ、そうした想像自体、そもそも湧き起こりようがなかったはずだ。(151頁)

◎近代人に取り憑く「個人」という考え

太宰治『秋風記』

「らっきょうの皮を、むいてむいて、しんまでむいて、何もない。きっとある、何かある、それを信じて、また、べつの、らっきょうの皮を、むいて、むいて、何もない、この猿のかなしみ、わかる？ ゆきあたりばったりの万人を、ことごとく愛しているということは、誰をも、愛していないということだ。」

一途に“本心”を求めながらも、結局のところ、そこには何も見つからない。その姿は、“分人”として揺れ動く心を持ちながらも、あくまで近代的な“個人”であろうとするために、“分人”的な心のあり方を批判せざるをえない——そんな心情として読める。それは、近代人としての煩悶であると同時に、太宰はその煩悶をどこか他人事のように揶揄し、嘯いているようにも見える。近代人のシニシズムは、このように、ひとつの心を起点にするがゆえ、と考えることができるのではないか。

◎参考文献

木村敏『時間と自己』中公新書 [1982]

私は何であるのか、という問いに対してはさまざまな角度からの答が可能だろう。私は何よりもまず私自身であるのだけれども、それと同時に私は臆病者であったり正直者であったりもするし、日本人であったり男性であったり、木村家の一員であったりもする。それだけではなく、私はまた妻にとっては夫であり、子どもたちにとっては父であり、学生たちにとっては教師であり、大学にとっては職員である。患者にとっては医者だし、門下生にとっては師匠である。このようにして、私が何であるかの規定の中には、「誰それにとっての」何者かであるという形での自己規定が幾重にも含まれている。このような自己規定の内容をなす自己のありかたを、役割同一性と呼んでおいてもよいだろう。(略)

役割同一性とは要するに、私たちににとって特定の立場にいる他者から、私がかくかくしかじかの役割行動をはたすことを期待され、私がある期待にこたえて遂行する役割行動に応じて当の他者から認知されることによって、はじめて成立するような自己のありかたである。(略)

われわれはふつう、このような幾重もの役割同一性によって自分自身をそのつど規定しながら、そうかといってそれぞれの役割同一性に自己を完全に同一化させるようなことは決してない。夫であることと父であることとは、ときとして互いに矛盾する行動を私に課すことがある。教師であることと医者であることは、必ずしも摩擦なく両立するとは限らない。(116頁)

河合隼雄『無意識の構造』中公新書 [1977]

たとえば、われわれは職業を代えても、私は私と思うだろう。住居を代えても、私には変わりはない。しかし、そのようにして、自分にそなわっているすべてを次々と棄ててしまって、そこに「私」というものが残るのだろうか。それは、らっきょうのように皮をはいでゆくと、ついに実が残らないものではなかろうか。(26頁)

鷲田清一『ちぐはぐな身体 ファッションって何?』ちくまプリマーブックス [1995]

「他者の他者」としての自己

他者たちとの関係をもたなくても〈わたし〉でありうるという錯覚にとらわれてしまう。そしてそのとき、〈わたし〉の経験から他者が遠のいていく。